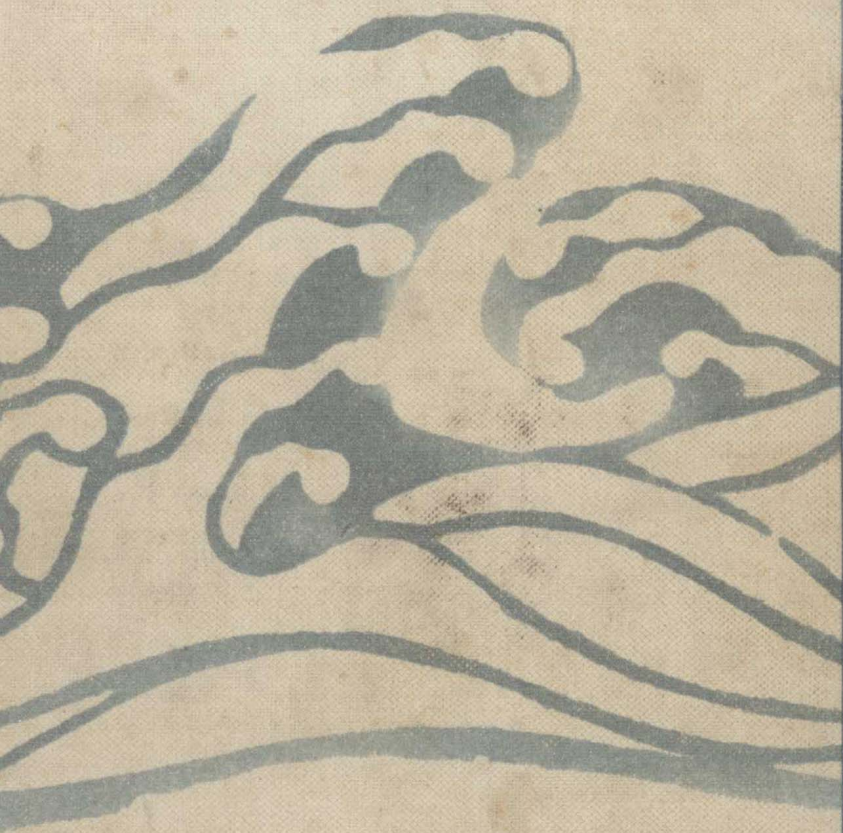






海音寺
潮五郎
全集

海音寺潮五郎全集 第四卷

蒙古来る

全二十一卷・第四回配本

九〇〇円

昭和四十五年一月二十日発行

著者 海音寺潮五郎

装幀 芹澤銑介

口絵 中尾進

発行者 大田信男

印刷所 凸版印刷

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

目次

蒙古来る

蒙古来る

昭和二十八年四月二十五日—二十九年八月十日「読売新聞」

えびす弓

朽ちかけた板ぶきの屋根に、風おさえにごろた石をならべた、みすばらしい家ばかりならんでいる小路から、風を切る勢いで、子供が三人、飛び出して来た。

なにがおこったのか、どこへ行くのか、ものも言わずに、いきせき切つて、大路を飛んで行く。

七つか、八つ。赤ちゃけたおんぼろ髪を、矜羯羅童子か、制吒迦童子みたいに、明るい初夏の日に逆立てて走る。ひざぎりの、糸目もよれよれの着物、はだし。よこれたほッべたに、目と血色がいきいきと美しかった。

すると、その子供等の走りすぎるあとの、小路小路から、同じような子供等が、いくらでも走り出して来る。

なんとまあ、子供ってたくさんいるものだろう。穴からはい出してくる蟻みたい。うじゃうじゃと出て来て、出て来るや、同じ方に飛んで行く。ほッべたをほてらせ、目がかがやかし、憑きものでもしたような、やみくもな様子である。

もちろん、だまっではない。わいわいべちゃべちゃと、子供のかんだかい声でわめきながら、語りながら、走って行く。

「あれまあ、どうしたことかいの」

「クグツかいな。田楽かいな。それとも、けんかかいな」
通りすがりの大人等も立ちどまって、子供の間を見送った。暗い家の中から出て来て、まぶしそうに目をしばたき、手をひたいにかざして見ている人もあった。

子供等は、大路を真直ぐに、三町ほど走って、土御門通りまで出ると、その角にあった、空やしきの前に立ちどまった。

以前、公家の邸宅があったのが、二、三年前、火事で焼けたまま、あとが建たない空やしきである。築垣だけがのこつて、方々くずれながら、とりまいていた。

子供等は、築垣のくずれから、こわごわ、しかし、呼吸をつめた熱心さで、小さな顔を内側にのぞけていたが、やがて、ぞろぞろと入って行った。

所々、ばかでかい礎石のちらばっている五、六百坪の、その空地には、いちめんに雑草がしげり、明るい陽が照つて、陽炎が立ち、はるかに向うに、ガラス板のように光っている古池のほとりの木立に、まといつくように、白い蝶が二、三匹、ひらひら、ひらひらと、舞っているだけであつた。

子供等は、一步一步、ひどく用心深げに歩いて、二、三間進み入ったが、その時、一番大きな礎石のかげに、むくりと動くものがあつた。

「わッ」

一時におびえ切った声を上げて、逃げ出したが、五、六

歩で立ちどまって、ふりかえった。

礎石のかけから立上ったのは、一人の男だった。

おそろしく大きい。たけも、横も、僧形だ。墨染の法衣、裏頭ずきん、腰に長い刀をさしている。

山法師か、寺法師か、と、思われたが、それにしては、どこかだらしない。酔っているのかも知れない。その大きなからだを、ふらふらさせながら、礎石に腰かけた。

僧形のその男は、ぐたりと首を前に垂れていたが、やがて、手をのびし、草むらの中からなにやらつかみ出した。酒徳利。およそ二升ほど入りそうな。

両手でかかえこんで、口をつけた。しだいに顔が仰向いて、徳利の尻が上にあがる。むさぼりのむ姿であった。

その間に、子供等はじりじりと近づいて、二、三間の距離までせまった。近くによると、体格の大きさが、さらによくわかる坊さまである。

大きな顔、はばひろい肩、酒壺をかかえた、黒い毛がもじゃもじゃと生えた、たくましい腕、草むらに踏んばった、太く長い、はだしの脚。

あおむいて、あらわになった太いのどの咽喉仏が、律動的に上下にうごいている。ゴクン、ゴクン、という音も、はつきりと聞こえた。

一種の壮観であったが、母親の乳房にしがみついている赤ん坊のような、ひたむきな、あどけなさもあった。子供等ののども、ゴクンと鳴った。

間もなく、坊さまは、徳利を口からはなした。大きな手のひらで、横なでに口をふいた。フー、と、長いいきをつけて、子供等の方を見た。裏頭ずきんの下のその顔は、まことに異様なものだった。まず、真直ぐにとおった隆い鼻筋、次に秀でた眉骨に半月の弧をえがいて生えた眉の下の目が、大きいくせにおそろしく奥まっていること。不思議な顔立ちであった。

その奥まった大きな目は、本来なら、恐ろしいものに見えたらうが、今は酔いに、とろんともって、視線が定まらないようであった。にたにたと、子供等に笑ってみせた。すると、大きな口から、よくそろった健康そうな真白な歯が出て、なんとも言えず、愛嬌のある顔になった。

呼吸をこらして、目をはなさず、見ていた子供等の中で、不意に言ったものがあつた。

「おれ、この坊さま、三べん見たで」

「おれかて！」

と、別のがこたええると、たちまち、蜂の巣をつついたように、口々にしゃべりはじめた。

「おれ、三べんぐらいやない。五へんも、六べんも見てるで」

「おれなんか、十べんも見えらい」

「この坊さま、酒好きなんや、いつも、鞍馬口の酒屋で酒買つては、このへんで飲んではんのや。おれ、ちゃんと知ってるで」

「そんなこと。この坊さま、弓が上手じょうずなんやで、小っさな弓持つてはるで。矢も小っさいんやで。おれ、この坊さまが、その弓で、鳶とびを射落さるの見たんやで」

「知ってらい、坊さまは、その鳶を食うてしまはったんやで」

「鳶食べはった？」

子供等が顔色をかえて、逃腰になった時、とつぜん、坊さまがへんな声を上げた。

「レロ、レロ、レロ、レロ……」

子供等は、ニタリニタリと笑いながら、レロレロレロレロといいながら、片手を上げて招いている坊さまを見ると、ワッとさけんで、逃げ出した。

みんなが行ってしまつて、坊さまは、ただひとり、陽炎かげろうの立つ緑の真中にとりのこされたが、様子は一向かわらない。

「レロレロ、レロレロ、レロレロ」

身をゆすりながら、舌ッ足らずな、まぬけた、奇妙な声を上げつづけた。

いつか、リズムカルな節調のあるものになっている。唄うたをうたっているつもりかも知れない。

レロレロ

レロレロ

レロレロ

だんだん愉うれしくなったのか、赤んぼのように頼りない声

が、せり上つて来たかと思うと、足許をさぐつて、一張ひとの弓をひろい上げた。

半弓より、まだ短い弓、この国ではめずらしいが、その道の人に言わせると「胡弓こきう」というやつ。楽器を奏かなでるように爪びいて、鳴らしはじめた。

思いもかけないことであつた。指まで剛こわい黒い毛の生えた、無骨むこつそうな大きな手の、どこにこの微妙な技がひそんでいるのであろう、左の五指で調子をとり、右の指を流れるように弦ゆづるの上を走らせるにつれて、哀かなしく美しいひびきが、立ちのぼつて来た。かほそく青い香煙かうえんのように、きえぎえになつてはつづき、つづいてはきえぎえになりつつ、青い空にひろがって行くひびき。

おのれの指の奏で出す、この哀婉あいわんで、はかなげなひびきに、坊さまは聞きほれているようだった。

口はきびしく一文字に結ばれ、小さくふるえていた。深い眼窩がんかの奥に瞑目めいもくしている眼から、涙があふれて、隆い鼻梁びやうりやうのわきを、筋を引いて伝っていた。胸をしぼつてやまない強い感動が、大きなからだを、切なくゆり動かしているようだった。

次第に高まる感動が、嗚咽おほえに似たうめきとなつて、二度ほど、はばひろい胸をうねらせて漏れたかと思うと、坊さまは弾奏をやめた。

早潮はやしほの落ちるようだった。緊張の色はたちまちその顔から消えて、あの間のぬけた、人の好きそうなものにかえつ

た。

数時間の後、坊さまはさつきより一層酔って、土御門の通りを、東にむかつて歩いていたが、前方から一人の行商女の来るのを見ると、おや！ という顔をした。

桂あたりから川魚の鮎でも売りに出て、家に帰りつつあるのだろう。浅い桶を四段に重ねて、頭にのせていた。

頭上の荷物のバランスをとるために、女は正面を切って歩いてくる。外八文字に両手をふり、思うさまに尻をつき出し、プリンプリンと、腰をふりながら来る。

次第に近づいて、すれちがおうとした時、とつぜん、坊さまはあの奇声を上げて、女の腕をひつつかんだ。行商女は、魂切の悲鳴を上げた。力一ぱいにもがいたが、ふり切れなかったばかりか、片方の腕までつかまれて、グイと抱き寄せられた。平衡を失った頭の上の桶が落ちて、転々ところがりながら、乾いた路面を四方に走った。坊さまの手からも、弓と酒徳利がはなれた。弓はピンとはねかえって、一間ばかり向うに飛んだが、酒徳利はみじんにわれた。それらのけたたましい音が、一層行商女を逆上させた。

行商女は、自分の背が、鉄のようにかたく頑丈な腕に、抱きしめられるのを感じた。空から真黒な雲がかぶさって来るように、裏頭ずきんの顔が、自分の顔をめがけて、蔽うてくるのを見た。悪酒の臭いと、異様な体臭とがごっちゃになって、えずき上げて来そうな悪臭。

「アレー、誰か来てえ！ 誰か来てえ！……」

必死な叫びを上げながら、女は反抗にうつった。山猫か、豹かなんぞのようであった。鋭い歯のかかりにかみつき、とがった爪のかかりにひっかいた。

大坊主はあわてた。あの不明瞭な声しか、声を出す術を知らないのであらうか、おそろしく早口に、あれをくりかえして、ひょこひょこと頭を下げる。それによって、行商女の猛烈な反抗をなだめようと、考えているようであった。そのくせ、背中を抱いた手は、寸分もゆるめようとしてない。

「この破戒坊主め！ 墮地獄坊主め！ 淫乱坊主め！ だまされへんで！ 追刺ぞや！ 人殺しぞや！ 人々、出合えや！」

「レロレロレロレロ……」

「だまされへんでーッ！ だまされへんでーッ！ 人々、出合えやッ！ 人殺しーッ！」

今はもう、坊主は、裏頭ずきんは引裂かれ、顔はむざんに噛みつかれ、引ッかかれ、血だらけになっていた。けれども、あくまでも思いをとげるつもりなのか、なだめるつもりなのか、へばりついたまま、レロレロをくりかえしていた。

不意に、馬蹄の音が聞こえたかと思うと、向うの辻に、数騎の武者があらわれた。暗くはなっていたが、暮れきってはいいない。一目でわかった。きびしく鎧った武者六騎。京の町の要所要所の篝火につめて、市中の警備にあたって

いる武士である。

行商女は、声をかぎりに、わめいた。

「人殺しーッ！ 追剥ぞーッ！ 助け給えーッ」

篝屋武士は、当時の武士中の花である幕府のご家人によつて、組織されていた。一斉に馬首をめぐらし、キッとこちらを見入ったが、次の瞬間には、もう、突進に移っていた。馬蹄の音と、物具のひびきの、騒然たる中に、するどい武者声がおこる。

「なにもののか者ぞ！ かしこまりも存ぜず、王城の地において、尾籠千万の狼藉！ しずまれ！ しずまれ！ しずまれ！ 下におろう！」

坊主はうろたえた。行商女から飛びはなれ、逃げようとしたが、こんどは、行商女の方が、そうさせない。武士等の出現は、マムシを食った山猫ほどに、この女の気を猛り立たせていた。坊主の腰をめがけておどりがかった。ダニのようにしがみついて、はなれなかった。

「このヘゲタレ坊主め！ この淫乱坊主め！ この墮地獄坊主め！ 逃がしてなろうか！」

と、悪態のかぎりをつくして罵り、その合間合間には、武士等と呼びかけた。

「殿様方やア、ここですぞよオ！ ここですぞよオ……」

七尺ゆたか、ちよいとした大仏様ほどもある坊主だ。渾身の力をこめて腰をふったら、行商女をふり飛ばすくらいのこと、わけなかったろうが、因果な性質だ、こうなっ

も、女には手荒くふるまえないのだ。やむなく、女を腰にぶら下げたまま、走り出した。

女一人を腰にぶら下げながら、なんという体力か、なんという脚力か、あの要領のわるさ、あの薄のろさを、夢かと疑わせる超人ぶりであったが、とたんに、頭ずれすれの所を、ヒュー！ と、するどい音とともに、かすめすぎたものがあつた。夜目にも、あぎやかであつた。白羽の征矢。

二矢、三矢、四矢。

わざと、矢坪をはずしているのであらう、あたりはしなかつたが、坊主は肝をつぶした。もう女に礼儀をつくしてはおられなかった。「レロ！」とまぬけた掛声とともに、腰を一ふりすると、まりのケシ飛ぶようだった。三間ほどもはなれた築垣の根元にたたきつけられて、ヒーと、悲鳴をあげた。

ゆるせ、いとしの君よ、とても言うつもりであつたろうか。

「レロレロレロレロ……」

と、投げつけておいて、走りつづける。

身軽になると、坊主の脚は羽が生えたようだ。たちまち、追跡者等を引きはなして、射程外にのがれた。

しかし、安心するには、まだ早かった。ふと、行く手の辻のあたりが、ボーッと明るくなつたかと思うと、手に手に松明をたずさえた騎馬の武者、七、八騎が駆けだして来

た。

明るい松明の明りは、それも篝火武士の一隊であることを教えた。追尾して来る武士等が、大呼した。

「これは、四条の大宮の篝火の者、その曲者、おさえ給ひ候え」

「うけたまわるーッ！」

前方の一団はこたえた。四人ずつ二列の陣形をつくるや、手ん手の松明を、前方に投げた。

松明はきえぎえになりながら、宙を飛んで、器械のような正確さで、路の中ほどに積み重なり、積み重なるや、長い大きな炎を上げて燃え立った。武士等のたくましい馬ときらめく鎧の金具とが、その明るい火明りに照らしだされた。

坊主は、右手の築垣の下に立ちよった。ほったのあたりを掻きながら、路の前後を見ていた。途方にくれた、遅鈍な様子であった。やがて、弓を持ちなおして、矢をつがえた。ひきしぼって、狙いをつけた。しかし、思い切れなかったらしい。すぐはずした。泣き出しそうな顔になっていた。

その間に、追跡の武士等は追いついた。坊主が居すくんでいるのを見ると、馬を飛びおりた。包圍の陣形をとって、じりじりとせまった。

武士等の包圍陣の真中に、坊主はノソノソ出て行った。「捕ったア！」

武士等は、精一杯の声でとなり、精一杯の力で飛びつきたようであったが、ピリッとも、相手を動かすことは出来なかった。

「手ごわい曲者ぞ！」

「心してかかれい！」

さらに、氣力をあげました。一人が弓をうばい、一人が太刀をうばった。これには無抵抗であったが、押しても、引いても、足の位置一つ動かすことの出来ないのは、同じだ。

そのくせ、氣がついてみると、坊主はヒョコヒョコと頭を下げていた。前後左右にぶら下った鎧武者の一人一人に、物悲しげで間のぬけた微笑を浮かべて、おじぎをくりかえしていた。武士等は、侮辱を感じた。

一人が飛び上ってなぐりつけた。かたい拳は、裏頭ずきんの中の鼻柱に、したたかな打撃をあたえた。坊主は奇妙なうなり声を上げた。

はじめて見る反応であった。皆勇み立ってならった。

しかし、いくらなられても、坊主にはこたえる様子がない。うなりを上げたのは、最初の一回だけ、あとはヌウと無感動に立っていた。

武士等はつらくなくなった。一種の練武心をそそられもした。坊主の両手を左右からおさえておいて、それに向って、一人一人かわり合ってはなぐりつけた。たしかに七尺はある相手だ。普通のなぐり方では十分に力が入らない。

だから、なぐり手は三間ほど退って走りかかりに飛び上ってはつきを入れた。

辻の一隊には、これがよくわからない。もみ合っているを見て、馬を急がせて行つたが、様子を知らず、すぐそれに加わつた。

しばらくの後――。

辻に人影が近づいて来た。二人。積みかさなつて燃えている松明の明りが、次第にはつきりと、その姿を浮かび上らせる。

長身の若い武士と、小柄な老女であつた。

二人は旅装してゐた。背に網袋入りの荷物を負い、老女は片手に市女笠、片手に細い竹杖をつき、若者は左手に、当時の武士の旅には欠くことの出来ないものになつてゐた弓を、たずさえてゐた。

最初に、老女が、行く手の暗中に行われてゐるさわぎに、気づいた。

「お待ち」

と、若者をひきとめて、前方をすかし見た。若者もそれになつた。

二人はそこに多数の馬の影と人影とがうごめいてゐるのを見、物具のふれ合う音を聞いた。また、時々、わア！と笑い出す声を聞いた。しかし、なにが行われてゐるかは、わからなかつた。

「見てまいりましょう」

若者は、弓を老女にあずけておいて、いそぎ足に近づいて行つた。

武士は、あきれて、大坊主の受難を見ていたが、やがて進み出た。

「おうかがい申す」

二、三人がふりかへつた。宵の眉底の下から向けた目で、じろじろと、見上げ、見下ろした。

「なんだ」

「これは一体、どういうわけでありましょうか」

「見ればわかるだろう。こらしめてゐる」

「各々方は、篝の衆でありましょうな」

「そうだ」

「職権をもつて、おとりおさへになつたにしても、無抵抗の者にたいして、このなされ方は、いかなものでありましょうか。罪科ある者なら、警固所に連れて行かるときで、路上においての、ほしいままな制裁は、不当と存じます」

いつの時代でも、下級役人が人民の正しい抗議に出あつた時の態度は、判子でおしたようだ。高飛車にどなりつけた。

「余計なことを申すな！ その方は何者だ！」

「てまへは、ごらんの通り、通りすがりの者」

おちついた調子が、一層しやくにさわつたらしい。別の一人が乗り出して来た。

「通りすがりの者はわかつてゐる。いずれの者で、名はなんというか。それを聞いてゐるのだ」

「それを申し上げる必要があるでしょうか」

「役儀をもつての尋問に、答える必要があるかとはなんだ。無礼なやつだ。引ッくるぞ！」

「これは乱暴な！」

「なにが乱暴だ！ 行け！ ぐずぐずしていると、その分には捨ておかんぞ」

と、さらに別なのが多くなった。

武士はむつとしたようであつた。しかし、老女がこちらに來かかるとに気づくと、黙って一礼して、そちらへもどつて行つた。

「なんでありました」

老女は聞いた。武士は手短かに、報告した。

老女は黙つて耳をかたむけていたが、聞いてしまうと、言つた。

「お気の毒な坊さまで。わたしから、おわび申してみましよう」

青年はとめた。話のわかる連中ではないと説明した。

「いいえ、それでは篝の衆方もお気の毒。お若い方々なので、言われてみて、もう悪かつたとはお気づきでありながら、意地になつておられるのです。ついて來やれ。腹をお立てでないぞえ」

杖をつきしめて、とほとほと進んで、呼びかけた。

「もうし。もうし。これは、肥後大草、獅子島の住人、源兵衛尉の後家と、その子小一郎正勝でござるが、

その坊さまは、どうして、そのようにきびしい折檻に遭つておられるのでありましょうか。どんな罪科があるか存じませぬが、坊さまのこと、まして、そのように温なしくしていただけるものを、お気の毒でみておられませぬ。出来ることなら、婆の後生願いに、ゆるして上げて下さいませ。お願いでございます。お願いでございます」

武士等は、老女の方を見はしたが、事面倒と見たらしい。互いにうなずきかわして、坊主の縛めにかかった。立去ろうとするもののようであつた。

すると、その時まで、おとなしくしていた坊主が、とつぜん、あの不思議な咽声をあげ、おそろしい勢いでおどりを上つた。

「あッ、こやつ」

武士等は、狼狽し、ふためき、ひしめいたが、坊主はもう老女のそばに走りよつていた。そのうしろにしゃがんで、かくれようとしていた。しかしどんなにちこまっても、大きなからだ、老女の小さいからだのかけにおさまらないので、あせり切つていた。

手を合わせて老女を拜んでいた。武士等が追いかけて來た。老女がなにやら言いかけたが、耳にもかけない。退け、退け、ええい！ 退けと申すに、と、さげびながら、一斉に踏みこんで來る。青年は、母をかこつて立つたが、

遮二無二、こみ合つて来る多勢である。ふせぎ切れなかった。横合から老女を突飛ばしたものがあつた。

小さいからだだが、小石のようにふっとんで、はるかなかなたに、横だおしになつた。

青年はわれを忘れた。母をつきとばした者におどりかかった。鎧の揚卷に手をかけて、グンと引きもどし、足をはらつた。相手はよろめき、朋輩にぶつかりながらたおれた。

「なにをする！」

武士は絶叫した。はねおきるや、飛びついて来た。

青年はひきはらずして、一足とびに、母のそばに飛んでいった。

追いつがつて来た。

「不埒者！ 逃さんぞ」

青年はふりかへつた。

「逃げはせん。あとでゆっくり相手する」

この時代の武士の気風の面白さだ。油断のない目を光らせながらも、立ちどまつた。

青年は呼んだ。人がちがうように、あわてた、切ない声であつた。

「母上、母上」

母は目をあいた。息子を見た。

「お怪我は……」

母は、首を振つた。

青年は、母を抱き上げて、築垣の下まで連れて行つた。背中の荷物をおろして、その上に坐らせ、弓と矢をそばに置いた。ひざまずいて言つた。

「しばらく、ここで待っていていただきます。あの人々と勝負をせねばならない行きがかりになりました」

母はからだをふるわした。

「わびを言つて。……ゆるしてもらいなされ……」

青年は答えなかった。母はまたふるえた。

「わびて下されや。わたしが出すために……」

哀願するような声であつた。

「わびます」

目を伏せて、低くこたえて、立上つた。武士の方にかへつて来た。

武士は、迎えて、刀を抜きはなつた。

「さあ、来い！ 抜け！」

青年は、頭を下げた。

「わびます。てまえ……」

武士は、恐ろしく腹を立てた。

「卑怯者！ 今さら。ならん！——抜け、抜け、抜かねば、そのままに斬つてすてるぞ！」

次第にせり上る声が、絶叫となつたとたん、

「エエイ！」

つん裂くような声とともに、真向から斬りかかつて来た。

片足引いて、斜めになる青年の鼻先を、キューッ！と、鳴って、刀が流れた。

その利腕をつかんで、青年はふるえていた。わき上ってくる闘志を、けんめいにこらえていた。

「小一郎どの、わびなされや、小一郎どの、わびなされや」

うしろから、母が必死の声をしぼる。青年は、また、武士に言った。

「ゆるしていただきたい。いかようにも、わびます」

つかまれた腕をもぎはなそうとして、相手はもがいていた。かみつくように白い歯をむき出し、じだんだふんでいたが、青年のことばを聞くと、

「ばかめ！」

怒り、軽蔑、くやしき、一切をこめてののしった。ふり切った。踏みこみ、踏みこみ、無二無三に斬りかかった。

青年の軽捷さは、すべての攻撃をはずした。武士は、目もくらむばかりに逆上した。

こちらで、坊主は、おれ重なってくる武士等に、なんの抵抗もしなかった。おとなしくおさえられ、おとなしく縛られた。観念しきっているように見えた。しかし、ふと、武士の一人が、その裏頭すきに手をかけると、急におちつきがなくなった。頭を振って、そうさせまいとした。武士等は、見のがさなかった。寄ってたかつて、ヒッペがした。

おどろいたことに、法師だとばかり見えていた頭には、髪があつて、頂きにわがねられているようであつた。一人がそれにふれると、波立つ黒い髪になって、サツと肩にこぼれた。

「あッ、こいつ、怪しい奴！」

武士等が、驚きさけんだ時、ヌツと立上つた。そして、一ふり巨軀をゆすつたと見るや、網目からだにからんだ縄は、糸筋よりもろく切れた。なにか、目をさました獅子のようなところがあつた。

武士等は、おぼえず、一步退つた。しかし、それはほんの一瞬のたじろぎであつた。八方から、ドツと襲いかかった。

巨漢は、一回転した。とりついた武士二人が、いとも無造作にふり飛ばされた。一跳躍した。さらに二人が、前後に蹴飛ばされた。その一人が、青年を相手にいどみ合つていた武士のところに飛んで行き、つきあたつて、おれ重なつてたおれた。

倫を絶した剛力もおどろくべきものだったが、不思議な闘法であつた。こんな闘法に、武士等は出会つたことがなかった。

巨漢の身のこなしは、柔韌自在をきわめていた。跳躍するにも、屈伸するにも、舞いの手のようなしなやかさと、美しきをもつていた。しかし、その足、その手にふれたが最後だつた。アッという間もなく、二、三間は飛ばされて

いた。

迷信的な恐怖が、武士等をとらえた。彼等は、大きく間合をとって、刀をかまえていたが、とうてい、踏みこんでしかける勇氣はなかった。次第に浮き足立ち、ついに、総くずれになった。

巨漢は、少し追いかけて引きかえして来たが、武士等の乗りすてて行った馬が八頭、おとなしくそこに立っているのを見ると、一頭一頭主人達の逃げて行った方へ鼻面を向け、尻をたたいて追いやった後、自分の刀、弓、矢筒をさがして、ひろい上げた。裏頭ずきんもさがし出してかぶった。

馬鹿でいいいで、のんびりした、そのやり方には、すっかり、本来の人の好きと、遅鈍さがかえっている感じであった。

彼は、のんきな足どりで、ふらふらと立去りかけたが、ふと、築垣の下にいる母子の姿に気づくと、急ぎ足に近づいて来た。

路傍の石仏のように坐っている老女の前にひざまずき、合掌し、なにやらしゃべりはじめた。

さっきの礼を言っているらしいのだが、あの奇妙なレロレロだ。まるでわからない。老女が、わからない、と、いうと、せきこんで、顔をしかめ、目をみはり、胸をたたき、はげしく身ぶり手真似して、レロレロレロレロと、はてしもない。

青年は、ふと、気がついた。

「母上、この人は啞なのではありませんか」

「おお、おお、なるほどのう。そうかも知れませんが、この人啞というものは、耳も聞こえないのが普通ですが、この人はいくらか聞こえるようです」

老女は、巨漢に、自分の口を指さし、首を振って見せた。

巨漢は、世にもうれしげに笑って、いくともうなずいた。

その時、武士等の逃げ去った方から、馬蹄の音が聞こえて来た。しずかな夜気をどよもして来るその音は、とうてい、十騎や、二十騎ではきかない。附近の簀屋から、助勢をもとめて、引きかえして来たものと思われた。

青年の胸はこごえた。簀屋は京中に四十八カ所もある。互いに連絡をとってくり出して来たなら、逃れる途はないのだ。

啞が、くるりと向きをかえて、大きい背中を、老女に向けた。おぶされ、と、身ぶりしていた。

しばらくの後、老女を背負った啞と、青年とは、ならんで走っていた。しかし、啞の快足も、今度は青年の足に合わしている。背後の響きは、しだいに迫って来た。

矢を射かけられないために、辻々では必ず折れたが、ともすれば行く先きに簀屋があり、人馬の響きがあった。

今はもう、全市中に水も漏らさぬ網が張られていると考